広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語・日本語における名詞修飾構造の比較方法について ： データに視点をあてて
Author(s)	本田，漠
Citation	ニダバ , 22 : 13 - 22
Issue Date	1993-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047237
Right	
Relation	

論　文

英語・日本語における名詞修飾構造の比較方法について

―データに視点をあてて―

本　田　　漠

1。はじめに

この西日本言語学会の名誉会長であります関本至教授に、私は先生の研究室で多くの教えをいただきました。30年も前のことです。理論としましては、数理言語学の手法であります。それ以後、私はずっとこの数理言語学およびその延長線上で研究をいたしております。今回、考察いたします対照文法学も、私としましては外国語テスト、機械翻訳などと同じく、数理言語学の延長線上の研究としてとらえています。

もう一つ、関本先生の教えで、後々まで私の言語研究、言語教育に大きく影響を与えられましたことがあります。ある時、先生がこう言われました。「言語学の対象は言語ですよ。」当時、数理言語学の先端的な理論の証明を求めて、悩みながらも続けていました私にとりましては、やさしい関本先生のおことばでしたが、それは雷神のように体の中をかけめぐりました。

今回の題名にも、このような方向で考えまして、「データに視点をあてて」と副題をつけさせていただいています。

英語と日本語を比較対照する場合に名詞修飾構造は興味のある構造の一つであります。事実、英日対照文法学の最初の本格的な研究は Kleinjans (1959) の名詞修飾構造に関する研究であります。この本を福岡教育大学の学部および大学院の学生と一緒に読んでみまして、いろいろなことを考えさせられました。それで、ここでは Kleinjans (1959) のことから始めさせていだきます。

Kleinjans (1959) は、 英語の名詞修飾構造と日本語の名詞修飾構造とを比較しています。名詞修飾構造は、前置名詞修飾構造と後置名詞修飾構造に分けられます。 Kleinjans (1959) の後置名詞修飾構造を、 私どもの理解と考察に便利なように一覧表を作りましたので、表１に示します。彼の方法を用いますと、前置名詞修飾構造の場合には、英語と日本語の対照分析をかなり並行しておこなえますが、後置名詞修飾構造の場合には、この表でわかるとおり、それはかなり困難であります。従いまして、もっと他の比較方法はないものかと考えさせられます。

表1　Kleinjans (1959) の後置名詞修飾構造

英語	日本語
5.2.1.　N pn-self;　N . . . pn-self The teacher himself came The teacher came himself	5.2.1.　N 自身;　N そのもの 先生自身 学校そのもの
5.2.2.　Pn N(s) we Americans	5.2.2.　Pn N われわれ日本人
5.2.3.　N Av the street below	
5.2.4.　N F (D) N the man in the house	
5.2.5.　N J V the man who saw . . .	
5.2.6. N J N-V the girl that the man saw N N-V the girl the man saw N F J N-V the house in which he lives	
5.2.7.　N V-ing the man standing there	
5.2.8.　N V-ed the house built last year	
5.2.9.　N to V time to go	
5.2.10. N (. . .) A (. . .) the man brave enough to go the best education possible	
	5.2.13.　N の A の ビールの冷たいの お茶の熱いの

名詞は N、代名詞は Pn、動詞は V、形容詞は A、副詞は Av、F 語群 (in, for など) は F、J 語群 (who, which など) は J で表される。　N および Pn の下線は修飾構造の主要部を示す。

2。データの用い方による分類

それで、この分野における研究書および研究論文において、データがどのように扱われているか検討し、分類いたしました。数十に及ぶ研究成果を読ませていただき、データの処理の視点から特に注目されるものをここに選びました。同じような処理方法であれば、初期のものを選びました。表2にこの「データの用い方による分類表」を示します。

表2　データの用い方による分類表

A。翻訳を中心的データとして用いない方法
★　変形操作を用いない方法 1．Everett Kleinjans (1959) *A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-Head Modification Patterns. Taishukan.* / 伊東 正 訳注 『日英両語の比較と英語教育』 大修館. (この本は、前半が伊東 正による日本語訳であり、後半が Kleinjans の英語の原文である。)
★　変形操作を用いる方法 2．長谷川 欣祐 (1964)「英語と日本語の名詞修飾構造」『ELEC BULLETIN』 (学研) NO.11 & NO.12.　pp.18-19.
B。翻訳を中心的データとして用いる方法
★　誤答分析・機械翻訳・文献（英日間の翻訳）からのデータを用いない方法 3．Charles Fillmore (1965) "On the Notion of 'Equivalent Sentence Structure.'" The Ohio State University, Columbus. Research Foundation. Project on Linguistic Analysis: Report No. 11. June 1965.
★　誤答分析を含む方法 4．Fumuo Kai (1977) "A Contrastive Study of the Relative Clause Structures in English and Japanese." 『鹿児島大学文科報告』 第13号. 第2分冊. pp.39-53 (pp.1-15). /『英語学論説資料』論説資料保存会. 第11号. 第1分冊. 1979年. pp.537-544.
★　機械翻訳による方法 5．成田 一 (1988)「機械翻訳と言語処理」『阪大ＫＳＥ研究会報告資料』 No.4. pp.20-42. /『英語学論説資料』論説資料保存会. 第22号. 第2分冊. 1990年. pp.848-859.
★　文献（英日間の翻訳）をデータとする方法 6．井出 祥子 (1971)「名詞修飾構造について ―― 日米対照表現構造試論 ――」『英米文学研究』 日本女子大学. 第7号. pp.53-69.

これらの研究のデータ処理における注目点について、一つずつ順に簡単に示すことにします。すなわち、名詞後置修飾のデータの取り扱いに視点をあてて、《各研究の要約》および《HONDA のコメント》の形式で、それぞれの研究の特性を示します。なお、日本語の部分がローマ字で書かれているものは、「漢字かな交じり」の表現に変えています。

2。1。 Everett Kleinjans (1959) の方法

2。1。a。《KLEINJANS (1959)の要約》

研究の手順は、 Robert Lado (*Linguistics Across Cultures* (Univ. of Michigan. 1957))に示されている次の３段階の具体的な比較手順を採用した。

第１段階：比較すべき言語についての構造記述のうち、最もすぐれたものを探す。

第２段階：すべての構造を要約して簡潔な綱領にまとめる。

第３段階：定型を１つずつとりあげて、両言語の構造を実際に比較する。

まず英語の形式をリストに載せて、これに相当する日本語の形式を探す手順に移った。もし一方の言語に他方に見合う形式が欠けていたら、そこは空白にしておき、「論究」の項で翻訳による相当語および原形式について知っておくべき諸条件を説明した。その例を表３に示す。

表３　Kleinjans (1959) における形式記述の例

英語	日本語
5.2.2.　Pn N(s) we Americans	Pn N われわれ日本人
論究:	
5.2.9.　N to V time to do	
論究： 日本語には、動詞とともに機能する to に類似の機能語はない。ただ動詞の非過去・平叙形が名詞に先行する前置の位置に生じて、同じ意味を表わす。たとえば、 行く時間　time to go 勉強する所　place to do research	

2.1.β.《HONDA のコメント》

この本は多くの問題点を提起してくれる古典的名著です。既に述べましたように英日対照文法学における最初の本格的な研究であります。 Lado (1957) の手順に正確に従って文法構造の対照をおこなっていますが、当時、既に研究がおこなわれていました Zellig Harris などの変形の概念を導入していないことも事実であります。しかし、論の進め方は本格的であります。すなわち、「英日両言語の構造」「比較の方法と理論」「転移および仮説」「比較および予測」「テスト」の順に、理論的に記述から実験へと研究を進めている点は見事であります。

2.2. 長谷川 欣佑 (1964) の方法

2.2.α.《長谷川 (1964) の要約》

英語の基本形から名詞修飾構造を導くと次のようになる。

〈1〉関係節を名詞主要語に付加する。例としては、(E1) と (E2) とから、(E3) が得られる。

(E1) The boy is/was Jim.

(E2) The boy is/was [very tall. / to do it. / weeping bitterly.]

(E3) The boy ┌ who is/was very tall ┐ is/was Jim.
│ who is/was to do it │
└ who is/was weeping bitterly ┘

〈2〉who is/was を省略する変形により、いろいろな後置修飾部が得られる。

(E4) The boy ┌ very tall ┐ is/was Jim.
│ to do it │
└ weeping bitterly ┘

〈2-i〉 very tall のような後置修飾部をもたない形容詞は義務的に名詞主要語の前に移されなくてはならない。

(E5) the very tall boy

〈2-ii〉単独の -ing 形、 -ed（過去分詞）形は、主要語の前に移すこともできる。

(E6) the bitterly weeping boy

〈3〉この他に be 動詞と共には起こらない（「進行形」のない）動詞でも、 -ing が付加され後置修飾部になりうる。

(E7) the man having a green hat

これらの英語の名詞修飾構造は、日本語の場合と比べると、かなり複雑である。日本語の名詞修飾構造は、一般的な１つの規則（および、わずかな義務変形）ですべての場合が扱えるからである。例としては、(J1) と (J2) とから、(J3) が得られる。（最後の２例では、義務変形によって、「は」は「が」または「の」になり、「だ」は「な」になる。）

(J1) 本がある。

(J2) ┌ 本が赤い。 ┐
│ 君が本を読んだ。 │
│ きのう僕は本を買った。 │
└ 本はきれいだ。 ┘

(J3) ┌ 赤い ┐ 本がある。
│ 君が読んだ │
│ きのう僕は買った │
└ きれいだ ┘

このように、日本語の修飾部は常に名詞の前に来ること、しかも簡単な１つの変形規則（英語の関係節付加に当たる）で、すべての修飾部が得られることから見て、日本人が英語の修飾構造を学ぶ際のいろいろな困難が当然予想される。

2.2.3.《HONDA のコメント》

この研究は短いけれども興味のある方法であります。「1.はじめに」で示しました問題点の一つの解であるといえます。すなわち、英日両言語の名詞修飾構造を並行して対照記述できる方法の一つであります。従いまして、この手法を用いますと英日両言語の名詞修

飾構造を比較することが、翻訳によらないでも可能になります。

2.3. Charles Fillmore (1965) の方法

2.3.α.《FILLMORE (1965) の要約》

英語および日本語の関係節形成過程の例は次のように示される。

(E-0) That person wrote a letter.	[初期表現]
(E-1) That person wrote	[a letter を削除する。]
(E-2) which that person wrote	[which をその前に置く。]
(E-3) the letter which that person wrote	[letter の右にそれを置く。最終表現]
(J-0) あの人が手紙を書いた。	[初期表現]
(J-1) あの人が書いた	[「手紙を」を削除する。]
(J-2) あの人が書いた手紙	[「手紙」の左にそれを置く。最終表現]

この場合、両言語の初期表現が互いに翻訳であり、かつ、それらからの最終表現が互いに翻訳である。このことは、一般的に、どのような文から始めても成り立つので、英語と日本語の関係節形成過程は同値であると言える。

次に、同値の表現の概念が示される。両言語において、次の３つの条件を充たせば、両言語の最終表現は同値であると言える。①基底となる初期表現が互いに翻訳である。②両言語の基底となる初期表現と最終表現の間の形成過程が同値である。③最終表現が互いに翻訳である。

2.3.β.《HONDA のコメント》

Fillmore (1965) の考えを図にすると次のようになります。初期表現（過程前）が互いに翻訳であり、最終表現（過程後）が互いに翻訳であれば、対応するＲ１（英語の関係節形成過程）とＲ２（日本語の関係節形成過程）は同値であります。

英語の初期表現 ←翻訳→ 日本語の初期表現
↓ R_1（過程） ↓ R_2（過程）
英語の最終表現 ←翻訳→ 日本語の最終表現

このように形成過程という操作を同値としてとらえている点が注目に値します。

なお、この研究におけるデータは機械翻訳で入出力されたものではないようですが、機械翻訳を想定した研究であります。

2.4. Fumuo Kai (1977) の方法

2.4.α.《KAI (1977)の要約》

名詞を修飾する限定的関係節は、英語および日本語に共通のものである。しかし、両言

語の間には根本的な相違もある。この観点から、英語の関係代名詞の形および働きに焦点をあてて研究を始める。英語の関係代名詞を５つ（Ⅰ.主格の関係代名詞、Ⅱ.目的格の関係代名詞、Ⅲ.所有格の関係代名詞、Ⅳ.前置詞の目的語になっている関係代名詞、 Ⅴ.前置詞の目的語になっている「所有格関係代名詞＋名詞」）に分けて、日本語訳をそれに添える。その一部分を例として表４に示す。

表４　Kai (1977) における関係代名詞の分類の例

Ⅰ. 主格の関係代名詞	the man who works at the store	その店で働く人
Ⅱ. 目的格の関係代名詞	the book (that/which) I borrowed from Paul	私がポール (Paul) から借りた本

５つの分類を見て、英語と日本語の関係節の特性を記述し、比較対照をおこなう。そして日本人が英語を学ぶときの困難点を分析し、予測する。テストは Part 1 および Part 2 の２種類で、日本人の被験者にそのテストをおこなった。問題の一部分を表５に示す。採点された問題は計４０問である。このテストで得られた解答をデータとして、日本人の英語学習についての困難点を分析した。正答率は、 (Ⅰ) 77.5%、 (Ⅱ) 86.0%、(Ⅲ) 66.0%、 (Ⅳ) 74.5%、 (Ⅴ) 37.0% となっている。

表５　Kai (1977) における問題の一部分

Part 1	和文英訳 これは、日本語と英語の関係代名詞構文の比較研究の資料としますので、出来るだけ関係代名詞を使って書いて下さい。出来ない場合は、関係代名詞を含まない文で、出来るだけ和文の意味を伝える英文を工夫して下さい。 10. これがフランクリンの住んでいた家ですか。 21. あれが、その姉さんのことについて私達が話していた少女です。
Part 2	Unite the two sentences into one by using a relative pronoun. The relative pronoun may be omitted. Example: Is this the typewriter?; You got it at Donaldson's. → Is this the typewriter (which/that) you got at Donaldson's? 11. The boy is Tom.; He was washing a car in front of the garage. 12. The house has now been repaired.; Its roof was damaged.

2.4.3.《HONDA のコメント》

以上、示しましたように、この論文の手法は Kleinjans (1959) によく似ています。すなわち、両者とも次のような手順で対照研究をおこなっています。

① 英語と日本語の文法構造の対照分析をおこなう。

② 日本人が英語を学習するさいの困難点の予測をおこなう。

③ 以上の研究に基づいて、日本人学習者に英語のテストを行い、結果を分析する。

特に異なっている点は、次の２点であります。

① Kleinjans (1959) では、名詞修飾構造の全体が扱われているのに対して、 Kai (1977) では、関係代名詞で導かれる関係節だけに範囲が限られている。

② Kleinjans (1959) では、 対照分析において、両言語が同一の文法構造を持っているかどうかの検討が中心で、翻訳は補助的である。すなわち、どちらかの言語がその文法構造をもっていない場合に、対照部分の下の「論究」において翻訳が示されるのであって、その文法構造を理解するために補助的に用いられている。しかし、 Kai(1977) では、翻訳は対照分析の初めの段階から用いられている。

2.5. 成田 一 (1988) の方法

2.5.α.《成田 (1988) の要約》

大型機用翻訳ソフトおよびパソコン用翻訳ソフトを用いて翻訳を試みた。その結果、原文の関係節は、ほぼ適当な翻訳が得られているが、原文の疑似関係節は適当な翻訳が得られていない。次の例は大型機用翻訳ソフトによる疑似関係節の翻訳であるが、非文となっている。

◎　　僕は母親が魚を焼く匂いがとても好きだった。　　[原文]

◎ *[救] I liked the smell by which the mother burns　　[翻訳]
the fish very much.

構造還元変換とは、言語間に対応する構造がないために、そのままでは翻訳不可能な構造を前処理して翻訳可能な構造に変える操作である。たとえば、疑似関係節は関係節に対する文体的変異形で、関係節を中核とした衛星的表現形式である。その意味で、構造還元変換は「衛星構造」を「中核構造」に変換する規則である。中核構造はどの言語にも存在する基本的な構造で、衛星構造は個別言語に固有の構造である。

(1-a) のような関係節の中には主部と同一の名詞が本来ある。(2-a) のような疑似関係節の中には主部と同一の名詞がない。「におい」などの系列の語について、(2-b) のように省略部を補う規則を設定することはできる。しかし、こうした応急処置的対応よりも、(2-c) のような構造的な処理の方が望ましい。すなわち、疑似関係節から関係節への変換の後に、翻訳をするほうが、比較的純粋な構造変換であるので望ましい。

(1-a) [昨日私の研究室に来た] 学生　　<関係節>

(2-a) [炭火で魚を焼く] におい　　<疑似関係節>

(2-b) [炭火で魚を焼く] 時に出るにおい

(2-c) [炭火で焼く魚の] におい　　<関係節>

2.5.β.《HONDA のコメント》

成田 (1988) のように機械翻訳の手法を用いますと、入力表現に変形操作を加えることによって、入力表現と出力表現の特性を浮き彫りにできます。これは、コンピュータを人工知能とみなしての実験と考えることもできます。被験者がコンピュータなので、同一の

被験者に対して、入力表現に種々の変形操作を加えて実験を繰り返しておこなうことができます。この論文では、関係節を中核構造、疑似関係節を衛星構造と考え、衛星構造から中核構造への構造還元変換を試みています。

2.6. 井出 祥子 (1971) の方法

2.6.α.《井出 (1971) の要約》

三島由紀夫 『近代能楽集』 (新潮社、1956、1968) と Donald Keene によるその英訳 (Yukio Mishima. Translated by Donald Keene. *Five Modern No Plays.* (Charles E. Tuttle Co. 1957, 1967)) を資料とした。

日本語の名詞修飾構造を基にして、それに相当する英語が英訳の中ではどのような表現で表されているか探し出した。その結果、日本語の「名詞修飾語＋名詞」という構造に相当するとして探し出された英語には、いくつかの異った構造があった。これらの英語の構造を分類し、日本語との構造上の違いを比較対照した。 (Attrib.: Attributive; N.: Noun)

「表現構造が同じもの・統語構造が同じもの」

日本語 SD: Attrib. + N.

SC: $X_1 + X_2 \longrightarrow X_1 + X_2$

英語 SD: Attrib. + N.

用例 よしよしいい<u>覚悟</u>だ。

A splendid <u>resolution</u>.

「表現が同じもの・統語構造が異なるもの」

日本語 SD: Attrib. + N.

SC: $X_1 + X_2 \longrightarrow X_2 + X_1$

英語 SD: N. (something, anyone, etc.) + Attrib.

用例 いやね、へんな<u>こと</u>を思い出したんだ。

No, I just remembered <u>something</u> funny.

「表現構造が異るもの」

日本語 SD: Attrib. + N.

SC: $X_1 + X_2 \longrightarrow X_2 + Y + X_1$

英語 SD: N. + be + Pred. Adj.

用例 いい<u>お天気</u>でございますよ。

<u>The weather</u> is wonderful.

2.6.β.《HONDA のコメント》

原文と翻訳の文献をデータとして用いる名詞修飾構造の対照研究は、予想外に、あまり多くはありません。その中で注目される研究は井出 (1971) であります。井出 (1971) の

手法では、日本語の SD（構造記述、 Structural Description）から英語の SD までの間を SC（構造変化、Structural Change）としてとらえています。すなわち、両言語のデータは全く具象的であり、両言語の関係を SC という好ましい操作的手法で示しています。

3。結び

以上、英日両言語の名詞修飾構造の比較方法を、後置修飾構造を中心に、データの用い方に視点をあてて検討し、分類いたしました。この検討の過程におきまして、次のような印象を持ちました。

この研究分野は日本人が独創的な研究をおこなう上で有利な立場に置かれる分野の一つだと思いました。そのためか、この分野におけるかなりの数の日本人研究者による論文が毎年出されています。ところが、残念なことに先行研究をそのまま移している研究もいくつかありました。それらの研究は、データを自分で集めていないものでした。

従いまして、この分野の研究におきましても、データを大切に考えて行きますと、まだまだ面白い、独創的な研究が行なえるようです。

今回の考察も、本学会名誉会長、関本至教授の教えに始まり、その教えで終わらせていただいたようです。

付記

西日本言語学会（1992年9月12日）におきまして、 約１時間の講演をさせていただきました。その原稿に修正を加え、ここにまとめさせていただきました。

会長の吉川守教授を初め会員の方々にこの講演をお聞きいただきまして、光栄に思っています。恩師、藤原与一教授から講演についての励ましのおことばまでいただきました。ありがたい気持ちで一杯です。

（1993年1月10日 受理）